

俺たちはイヌではなく、犬様なのだ！

俺は犬だ！ ただし、親友の振りをして同胞を容易に裏切る存在つまりニンゲンが言う意味での「イヌ」すなわち「スパイ」まさに「面従腹背（めんじゅうふくはい）」——俺たちの表現では「尾振牙磨（おふりきばとぎ）」——のことではない。本物の犬なのだ。

デスマوند・モリスは俺たちの同胞に関する名鑑を作成したが、その犬種は（二、三百というおおかたの予想を裏切つて）千種以上の多様性があるらしい。そもそもニンゲンのうち人類学者という人種は、「人種」概念を大変嫌うらしいが、反対に、俺たちはその多様性にプライドをもつ。俺たちは犬種の多様さを「同胞の豊かさ」としてしか理解できない。しかし、どうもニンゲンは「違い」があると、違ったものどうしに貴賤の区分をもうけて「人種差別」という相互排除をする似たものどうしで群れる悲しい性向があるらしい。

俺たちの御先祖様のオオカミには、そのような群れの生活という性格をもっていたが、それはオオカミの連中には「異種協働」という生命体の生存戦略に関する基本的な高等戦術を獲得していなかったからだ。俺たちにとりその異種とは「犬とニンゲン」の関係に他ならないのだが、おめでたいニンゲン様は、そのきっかけは、オオカミがニンゲンの集落の周辺部にあったゴミあさりをしていて、それをニンゲンの最初の家畜すなわちペットにしたのだという浅はかな仮説を信じている。そもそも、同胞間で平気で差別をするという、その悲しい性癖をもつニンゲン集落のまわりには、より卑しいニンゲンがゴミをあさっており、その意味ではゴミあさりをするオオカミをみて、彼らがそれを軽蔑したことは吝かではない。だからニンゲンは、そんな卑しい泥棒のような存在を未だに「イヌ」と呼んで憚らないのである。

もつとも、この仮説にも傾聴する点があるのは、ニンゲンが乞食のような同胞のニンゲン集団を軽蔑して、むしろオオカミのほうがまじだと思つたことにある。だから、オオカミは、近隣の同胞の他者のニンゲンよりも容易に愛着の対象、すなわちニンゲンが言うところの「ペット」になることができたのだ。ニンゲンは、ホントは、家畜化されたオオカミすなわち犬に対して愛着を一方的に押し付ける存在になつたにも関わらず『家犬文化総合史』と呼ばれる本には「餌をもらえる犬の先祖が野生種の孤高さを次第に欠いて、自ら人間に懐いてゆき馴化されたのである」と記す始末だ。

このようなニンゲン中心主義の弊害は、先に述べた異種協働の進化論的意味をいまだに理解できない低い認識の水準にニンゲンの知性を留めているのである。それゆえに、同書では「世界最古の家畜である犬は人間にとって、いまだペットの水準に留まつており、食肉を提供するような体型の大型化という進化を遂げることができなかつた。犬は家猫とならんで、人間のおおきな寄生虫なのである」と、俺たちに対して最大級の侮辱の文言を連ねている。ここで、このような人間の育種学上の非常識に対して異論を唱え、訂正を最後にしておきたい…「愛情を注ぐ対象にのめり込む盲目的性が、犬よりも人間が強いという動物行動学的特徴から言つて、犬は人間にとっての寄生虫と言うよりも、人間が犬にとつての《愛情の寄生虫》に他ならないのだ！」と。

（代読・池田光穂）